

『菅家須磨記』の成立と流布についての試論

妹尾好信

【キーワード】菅家須磨記、須磨記、菅原道真、偽書、壺井義知、多田義俊、前田綱紀

はじめに

『菅家須磨記』は、菅原道真に仮託された実録・紀行の書で、右大臣任官から、突然の太宰権帥への左遷決定、以後都を離れるまでの間の自身や周囲の人々の思い、離京から須磨に至るまでの動向が、ほぼ一人称のスタイルで描かれている。古くは道真自作と信じられ、天神信仰を背景にすこぶる珍重されて世に流布したようで、多くの写本が伝わる他、二種の版本（文化七年（一八一〇）刊、文政十年（一八二七）刊）も刊行されている。

そんな中で『菅家須磨記』を「いみじき偽書」と喝破したのは本居宣長であった。『玉勝間』二の卷（寛政七年（一七九五）刊）において、菅原大臣のかき給へりといふ、須磨の記といふ物などは、や、よにひろごりて、たれもまこと、思ひためる、これはいみじき偽書なるをや、かゝるたぐひ数しらずおほし、

と述べ、清少納言に仮託された『松嶋日記』などと同類の偽書であ

ると一刀に断じたのである。また、尾崎雅嘉の『群書一覽』（享和二年（一八〇二）刊）和書部三・記行類にも、

菅家の御作といひて世にひろくもて興してまことのものとおもふ人多しこれは菅神つくしへおはします時すまのうらまでの道の記にてことばづかひふるめかしく書なせるものなれど偽書なること明らかし。

とあって、近世後期になると、識者はその偽書なることを見抜いていた。それでも偽書説にはむろん反発もあって、たとえば、岩田友晴著『菅公遺著 須磨記』（明治三十五年（一九〇二）刊）に寄せた巻頭識語において、宮地葉天は、

曾つて本居宣長大人の偽作と謂ひしも何の據りところありてや、本書文辞拙なしといへるは或は然らんも、菅公の著述に此體のものなし、彼是對照の便なくんば、何を以つて菅公の筆にあらざといふか、唯恐る、は幾たびか謄寫の際、多くの誤謬を傳へたるなきやの一事とす。

と言っており、なお道真自作を信じる見解も一部にはあった。しかしながら、近代以降は明白な偽書と見なされ⁴、それゆえに研究の対象とされることもほとんどなかったし、活字刊行の機会もなかなかなかったのであった。

ところが、近年になって、津本信博編著『近世紀行日記文学集成』第一卷（平成五年 早稲田大学出版部刊）に収められて本文が活字化され、次いで千本英史責任編集『日本古典偽書叢刊』第二卷（平成十六年 現代思潮新社）では、初めての近代的な注釈が公刊されるなど、読みやすい本文が提供され、徐々にではあるが研究の日が当てられるようになってきたのはよろこばしいことである。

私はこれまで、『菅家須磨記』の伝存状況を調査し、諸伝本の奥書・識語等から、書写年代や書承に関わった主要な人物について考察して、伝承に関する基礎的な研究を行ってきた。本稿では、それらの成果を踏まえつつ、本書の成立と流布の実態に関して、若干の考察を試みたいと思う。

一 成立時期は享保年間か

『菅家須磨記』が道真自作ではなく、昌泰・延喜の頃の成立ではあり得ないにしても、実際に作られたのはいつ頃のことなのであるうか。

諸伝本の中で最も古い年次を記す奥書を有する本として、天理大学蔵竹柏園文庫旧蔵本（『須磨日記』と題する）がある。同本の奥書には、

次のようにある。

〔A〕

右三巻之日記菅庶辞都之旅

記也自往昔雖握翫其感不少仍送

遠卿畢

建武二年二月下旬

栗門枳

〔B〕

須磨日記三冊以二条羽林家本写之

其後以官本校合畢

文明元年十月下旬野史

藤兼良

御在判

すなわち、〔A〕建武二年（二三三五）二月下旬に「栗門枳」なる人物が書写した由と、〔B〕文明元年（二四六九）十月に一条兼良が「二条羽林家之本」を書写し、「官本」で校合した由の二段階の奥書が存在するのだが、二条家に伝わった本を兼良が書写したというのは、いかにも権威付けのために創作された奥書らしい。また、北海学園大学蔵の注釈本『菅丞相須磨之記』の見返に貼られた押紙には、「元本は應永年中の写本⁵而むしはみ多く有之候所」云々とあって、応永年間（二三九四―一四二八）の古写本がもとであることを記しているが、これもことさらに親本を古い本に見せるための記述であって、信用できるものとも思われない。なお、竹柏園旧蔵本には、本文中の「道

ある御代に立しそかむも」の箇所に「△ひしりの御代に身をはふらかさむも△後水尾院御本ニかやうに書かへたまへり」と傍記があり、「後水尾院御本」なる伝本の存在に触れる。後水尾天皇（一五九六一一六八〇）の書写本ならば寛永（一六二四―一六四四）頃にはすでに成立していたかとも見えるが、これも一種の権威付けであろうと推測される。

このように中世期の書写を示す奥書は信用できそうにないのだが、信憑性のある奥書類によって、本書成立の下限を推定すると、早く津本信博氏が、

現存本の書写年時から推して蓬左文庫蔵本の享保十六年写が最も古く、次いで名大本（皇学）の享保十八年・速水房常写本、早大本の享保二十年・疑子写本をあげられるが、今のところ享保年間を遡るものは見当たらない。⁵⁾

と指摘しておられる。私に行なった諸本調査によっても、奥書や識語に記された書写年次が享保年間をさかのぼるものは確認できなかった。ただし、津本氏が最古とされる享保十六年写の蓬左文庫蔵本よりも古い書写本は存在する。岡山大学蔵池田家文庫A本は目録によれば享保十三年写とあり、大阪天満宮蔵D本の本奥書にも享保十三年五月書写のことが見える。また、大和文華館蔵本の本奥書には享保十四年九月書写の由を記している。したがって、今のところ、本書の成立は少なくとも享保十三年（一七二八）以前であるということになる。

津本氏が挙げられた以外に、享保年間の書写を伝える伝本としては、東海大学蔵桃園文庫C本と架蔵の一本には蓬左文庫蔵本と同じく享保十六年十一月の本奥書が見え、相愛大学蔵春曙文庫本と神宮文庫蔵A本は享保十九年の書写、奈良女子大学蔵本と広島大学蔵A本には享保二十年二月の本奥書があり、大阪天満宮蔵D本の沢田一斎による書写奥書も同年十一月、京都女子大学蔵本も同年の書写である。

このように、『菅家須磨記』は、享保十三年頃に忽然と世に現れ、以来続々と書写が重ねられて急速に広まったのであった。

二 壺井義知作者説について

さて、本書伝本の奥書によって、作者を江戸中期の故実家、壺井義知（^{よしか}一六五七―一七三五）ではないかと推定する見解がある。津本信博氏の説である。津本氏は、

内閣文庫本が壺井義知写であり、九大本が壺井義知注本であることから察すると、享保二十年十月、七十九歳で他界した壺井義知の手になる可能性も大きいと言わねばならない。⁷⁾

と言われる。義知の書写・施注を示す奥書を有する伝本が複数存在すること、本書が盛んに書写され世に広まっていた享保十年代が義知の晩年に重なることがその理由であるようだ。

確かに、諸伝本の奥書には、壺井義知の書写・施注を示す記事を有するものが少なからず存する。先に掲げた大和文華館蔵本（享保十四年本奥書）、蓬左文庫蔵A本（享保十六年写）、東海大学蔵桃園文庫

C本（同年本奥書）など、比較的書写年次の古い本に見えるので、義知が早い時期に本書の書写に関わった人物であることは疑いない。

津本氏が指摘される通り、内閣文庫蔵B本は義知自身の書写本とされており、奥書には次のようにある。

此一書加州金沢或人之許より借写して

且加傍字訖

壺井義知

印

これによれば、義知は『菅家須磨記』を金沢在住のある人（傍書によれば「川嶋氏」）から借りて写し、傍字を書き加えたという。実際、内閣文庫蔵B本には多くの傍字が朱書されている。仮名主体の文章で意味を取りにくいいため、義知は振り漢字を施すとともに、行間に簡略な注記を加えたものである。朱の読点も付されている。これを信じる限り、義知は『菅家須磨記』の作者ではなく、あくまで書写・施注者であるということになる。

また、諸伝本を検するに、義知の奥書には何パターンかが存在することがわかる。内閣文庫蔵B本の形の他に、次のようなものがある。

I 筑波大学蔵A本等

此一書加州金澤自川嶋氏傳來之尤殊勝之御記也

義知判

II 蓬左文庫蔵A本等

此一書加州金澤川嶋氏より至來して写とり

ぬ尤殊勝之御記也

朱傍註義知判

III 射和文庫蔵本等

再三校合加朱字傍注畢

壺井義知印判卷

IV 九州大学蔵B本

右壺井義知加傍註畢

このうち、IIが最も一般的な義知の奥書であると言え、「至來」を「到來」とするなど小異はあるが、多数の伝本の本奥書として見えている。これらの奥書から推測されるのは、義知は再三にわたって『菅家須磨記』を書写し傍注を加えたのであり、それら各本が門人や知人に分け与えられたり貸し出されたりして写され、また他本との校合もされて次第に世に広まっていったのだということである。

内閣文庫蔵B本と、I・IIの奥書に共通して書かれていることから、『菅家須磨記』が金沢の川嶋氏からもたらされたということは信用すべきであろうと思う。門人の多田義寛（義俊）の著『蕁菜草紙』卷之三には、義知の経歴について、

一 たん大坂へ出て商家に倣ひしが、去て信州の松本に行、いさ、かのしるべに便りて、手迹十露盤を云立て、代官手代を望たれ

ども事不調。此を去て加賀に遊ぶ。暫く有て、加州の縁を以て、四辻殿を便りに上京し、青侍を勤む。

云々と記す。義知は金沢に住んだことがあり、金沢には浅からぬ縁があるのである。仕官を望んで信州松本藩に行ったのは延宝五年（二六七七）、金沢から上京して四辻公韶に仕えたのは貞享二年（二六八五）のことというから、金沢在住は天和〜貞享初年の頃であ

る。「川嶋氏」なる人物の知遇を得たのも金沢居住の縁によるものに相違ない。

「川嶋氏」については、中村幸彦氏が、金沢の商人で、南楼と号した河島正卿であるかと考証された。¹²すなわち、富田景周編『燕台風雅』巻之八に、

河島正卿字尚齡、通島屋與三兵衛號三南楼、金澤賈人、其詩出

三八居題咏附録、又正徳中、與韓客李重叔南中容唱酬詩、見

三雞林唱和集。享保十二年五月廿日、遊三河北郡湯桶温泉、賦

三十勝三詩歌、其遺卷今猶取湯邑某家、其卷中一瀬秋月、落木

蕭蕭月色明、断岸百尺板橋橫、水中金影人難掬、淵底珠光魚

欲驚、得三佳趣、又入三中院垂相通躬卿之門、学三国朝歌、

有下得三姿體三者、而屢賜三褒詞、其風致可思。¹³

と記すところの人物である。生没年は不詳だが、正徳年中（一七一―一七二一）に韓客二人と詩を唱和し、享保十二年（一七二七）に湯桶温泉にて十勝の詩歌を賦したとあるから、義知の金沢滞在中に交渉を持った可能性は大きい。金沢を離れた後にも交友があり、享保十年前後に正卿から『菅家須磨記』が義知のもとに到来したと考えてよいのではないかと思う。

したがって、壺井義知は『菅家須磨記』の偽作者ではなく、初期の享受者であり、振り漢字・傍注などを施して読みやすくした書写本を何度も作成して、同書の流布に大きく貢献した人物と見なすべきだと思われる。

三 多田義俊作者説について

壺井義知と並んで、早い時期に『菅家須磨記』の流布に関与した人物に、義知の門人である多田義俊（二六九―一七五〇）がいる。義俊は、神道家・故実家であるとともに、浮世草子の作者としても名高い。南嶺・春塘・秋斎などと号した。義俊が大坂から京都に出て、義知の門に入ったのは、ちょうど『菅家須磨記』が書写され始めた享保十三年（一七二八）、三十一歳の時という。¹⁴義知のもとで『菅家須磨記』に接した可能性は大である。

義俊の奥書は、筑波大学蔵A本、広島大学蔵C本、東北大学蔵狩野文庫本、大阪天満宮蔵C本、同D本に見えている。¹⁵筑波大学蔵A本では、先に示したIの形の義知奥書があり、次に「此書者菅神御記也讀者盍漱而可拜見也」との一文を記した後に、次のような義俊の奥書がある。

菅贈大相国貶三太宰府之行至三須磨三記一卷、感恨不少レ矣。菅氏之縉紳六家、高辻・五条・唐橋・東坊城・桑原・清岡、皆失三之於中古之兵火、不レ傳三于子孫三也。加賀條某卿得一本於金澤府、贈三傳寫本三各一部諸菅家也。別三出三自三筑三前一商夫手之本、合三彼三加賀本三大同小異、今在三清家文庫三也。以三兩本三一過校三合之三粗如故正本讀者正其添塵三。

多田義俊書豊軒

ここに記された『菅家須磨記』の由来は、だいたい以下の通り。

道真の子孫である菅原氏の公家はその後、高辻・五条・唐橋・東坊城・桑原・清岡の六家に分かれたが、どの家も『菅家須磨記』を戦火で失って伝えていなかった。そこで、「加賀侯某卿」が金沢において本書一本を得、写本を各家に一部ずつ贈った。それとは別に、筑前の一商夫から出た本があり、それを加賀の本と比べ合わせると大同小異であった。今その本は清家文庫（舟橋家の文庫か）にある。自分は両本をもつて校合して正本と言うべき新たな写本を作った。ここで義俊が「加賀本」と言っているのは、「加賀侯某卿」が金沢で見出して菅家各家に寄贈した本を指すのであろうが、義俊がそれを直に見たとは思えず、実のところは、金沢の「川嶋氏」から伝来した本の義知書写本のことであろうと思う。

大阪天満宮蔵C本は、前見返にこの義俊奥書を記すが、巻尾には筑波大学蔵A本と同じI形の義知奥書と「此書菅神御記也」云々の一行を記す。前見返末尾に「墨校入江昌喜」とあるのと同じの筆跡に見えるので、入江昌喜（二七三―一八〇〇）が書き付けたものだろう。広島大学蔵C本では、II形の義知奥書があり、その後この義俊奥書が書かれている。東北大学狩野文庫蔵本には義知奥書はないようである。

大阪天満宮蔵D本では、義俊奥書は扉にあるが、次のようにあって、若干簡略で、署名もなく、他とはやや異なっている。

菅公遷^ニ任^{スル}太宰ノ権^ニ帥^ニ之路。京^{ヨリ}至^レ撰之須^ノ浦^ノ紀^ノ行
一卷。菅氏ノ之^ノ禪^ノ神^ノ家。高辻 五条 桑原 唐橋 東坊城 清岡何^ノ時^ニ失^ヘル^ヤ不^レ傳^ハラ^ニ於

其文庫^ニ也。加賀參議某卿^{（マヤ）}待金澤得^ニ一本^ヲ。寫^{シテ}贈^{レリ}于^ニ菅氏ノ之^ノ諸家^ニ。其後自^レ筑前國ノ一^ノ商夫之手^ニ。傳^フ一本^ヲ於^テ清家^ニ。而^{シテ}兩本行^ル于^ニ世^ニ大同小異^也。今以^テレ朱^ヲ一過校^ニ合^{スト}之^ヲ云^フ。（返り点と句点は朱）

どうもこれは他本の形のように整えられる前の形態ではないかと推測される。「加賀參議某卿」が金沢で見出し、菅氏の諸家に贈った本と、筑前国の商人から出て清家（清原氏の意であろう）に伝えられている本の両方が世に行われているが、中身は大同小異であるという。「一過校合」したというのは、その両系統の本を校合したというのであろうか。

同本の巻末には次のような四段階にわたる奥書がある。

〔1〕右菅家須磨記^{（マヤ）}一卷近頃金澤文庫より出しを

つたへうつしぬ文字を不填其俣也（こまで朱、以下は墨）

〔2〕享保戊申之仲夏廿九日借高森氏蔵本所

贍^{（マヤ）}写了 埴鈴家蔵

〔3〕享保乙卯四月廿一日借谷川氏本書寫

奚疑齋

〔4〕奚疑主人携^ヘ此^ノ聖文^ヲ來^テ而請^フ朱^ヲ於^ニ余^ニ勘^ヘ之^ヲ於^テ

定本^ニ或^ハ加^ヘ之^ニ案^ヲ還^{スト}云

春塘

〔1〕はおそらく「加賀本」の奥書で、「金澤文庫」というのは金沢の文庫の意であろう。すると、〔2〕〔3〕が筑前本系統の奥書とということになる。〔2〕は、享保十三年（一七二八）五月、高森氏の

蔵本を埴鈴氏が借り写したという内容の奥書〔3〕は、その七年後の享保二十年（一七三五）四月に谷川氏の本（谷川士清とよひら（一七〇九—一七七六、号淡齋）所持本か）を借りて写したという奚疑齋（沢田一齋）の奥書。そして、〔4〕が春塘すなわち多田義俊の奥書である。奚疑主人がこの書を携え来て、自分に朱を入れることを請うた。そこで、この本を定本にして本文を検討し、あるいは注記をも加えて返したというような内容かと思われる。

これによれば、義俊が『菅家須磨記』を書写・校合したのは奚疑齋の依頼に答えたもので、享保二十年以後ということになる。

大阪天満宮蔵B本にも奚疑齋奥書があり、巻首には「奚疑齋蔵書」の朱印もあるから、一齋による書写本である。次の二段階の奥書がある。

〔A〕此一書加州金沢川嶋氏より至來して

うつし了ぬ尤殊勝之御記也朱字磨字 義

〔B〕右須磨記一帖借速水氏蔵本書寫一校畢

寛保紀年季秋 奚疑齋

〔A〕はⅡ形の義知奥書である。〔B〕は、寛保元年（一七四二）八月に速水氏の蔵本を借りて写したという奚疑齋の奥書である。「速水氏」とは義知の門人である速水房常（一七〇〇—一七六九）であろう。

名古屋大学皇学館文庫蔵本も、速水房常書写本から出た転写本であり、享保十八年（一七三三）七月の房常奥書がある。同本にもⅡ形の義知奥書があるから、もとは奚疑齋が借りて写したのと同じ本

である。

奚疑齋は享保末年から元文の頃、『菅家須磨記』を入手していたく興味を抱き、義俊に校勘・付注を依頼した。奚疑齋は京都の著名な書肆風月堂の主人風月庄左衛門であるから、あるいは将来の上梓をも念頭に置いていたのかも知れない。その後、寛保元年に房常の本を借りて書写したのも同書に対する関心が薄れていなかったからであろう。

この奚疑齋が義俊のもとに持ち込んだ本には義知の奥書がなく、房常蔵本を写した本にはあることに関して、中村幸彦氏は次のように言われる。

『須磨記』に義知奥書の有無二種があることになる。その内、無い方が早いとするのが常識であろう。この種の奥書の信用度は低いけれども、義知の歿年享保二十年に、一齋が見た本に奥書がなく、寛保元年同人の写本には存する。この奥書は義知歿後に加えたのである。こんないたずらをするのは誰だろう。多田南嶺が先ず頭に浮かぶ。この門人は、師の花押の真似もできようし、記述の如く義知と金沢人との関係も知っていた。しかも早くからこの本に関係する南嶺の仕業と見て間違はなからう。

こうして中村氏は、多田義俊を『菅家須磨記』の偽作者と認定される。

私は一応この本は多田南嶺が作った偽書であると定めたい。それをその内実を知っている淡齋や一齋らが、面白がって写した

り（その間に架空の奥書を彼らも試みる程の洒落気を、二人とも持合せていたと思う）、更には南嶺にすずめて注を加えさせたのではあるまいか。

さらに、

偽りの引用書を使った南嶺ではあるが、この書は「偽書」として著したのではあるまい。菅公に擬して作った一種の弄文であって、広く世に流布させるよりは、限られた同好の知人へのみ示すべく執筆したのではないかと思う。一斎や淡斎らは、南嶺が読者として限った範囲の人であった。義知とか金沢とかの意味する処も直ちに解し、弄文としては面白いと思う。前田侯が見出して清原家へ送る話にも一笑する。似合った注に、たとえ偽書の引用があったとて、それも興を加える種である。私はかかる作品を、偽書と称さずに、擬作とでも呼んで区別すべきことを提唱する。近世や、さかのぼって中世の社会、文壇の如く、文学作品をめぐる作家と鑑賞者の交渉する場の狭く限られた場合、その上に文壇に伝統的な気分の続いている時代には、この種の擬作が出現するのではあるまいか。そうしたものを、本居宣長や以来の学者が下して来たように偽書の一語をもって、ほふり去るべきではなく、それを擬作として鑑賞するのが、文学史的学的にあるべき姿勢ではないかと考えている。

と、独自の「擬作論」を展開されるのである。さすがは一代の碩学の論で、読む者をうならせる力があるが、やはり私には『菅家須磨

記』を壺井義知の没後に多田義俊が「擬作」したものと考えるのはいささか無理があるように思われる。

一つには、義知自筆の写本が内閣文庫蔵B本として残っていること。同本の奥書には「壺井義知」の印が捺されているので、義知自筆を疑うのは難しかろうと思われ、義知の生前に『菅家須磨記』が存在していたことは間違いないこと。一つには、前述のごとく、義知の奥書にはいくつものパターンがあつて、義知は再三にわたって『菅家須磨記』を書写していたこと。これは門人や知人に貸したり分け与えるためと考えられ、義知にはこの書を世に広めようとする意志が感じられること。そして、一つには、義知が没する享保二十年（二七三五）よりも数年前の同十三年（二七二八）頃から『菅家須磨記』は盛んに書写されていることが諸伝本の奥書から知られること。さらに、四つには、義知の奥書を持たない本には、振り漢字や読点、傍注などをいっさい持たない本がいくつも存在すること。

中村氏は、「平仮名の多い古語に漢字を当てたその漢字を附した写本は、頗る多い。漢字の方は、若干省略したり不注意で落したものもあるが、全写本に及んでいるのかと思われる程である」と言われるのだが、そんなことはない。筑波大学蔵B本、神宮文庫蔵D本（清濁集本）、陽明文庫蔵本など、私が確認しただけでも振り漢字も傍注もない本が数本は存在するのである。

中村氏は、多田義俊は「言の信用できない人である」と言われており、奥書の記述なども疑ってかかるのが当然という姿勢なのであ

るが、私は、義俊の奥書も義知の奥書も極力信用する立場に立って、以下に『菅家須磨記』の成立と伝来に関する憶測を述べてみたいと思う。

四 加賀藩主前田家と『菅家須磨記』

まず、壺井義知の奥書を信じるとすると、『菅家須磨記』は、金沢の「川嶋氏」から義知のもとにもたらされたものである。「川嶋氏」が金沢の町人学者河島正卿と考えられること、義知の金沢とのゆかりは前述の通りである。金沢に存在していた『菅家須磨記』は、当地の知己のもとから故実家として著名な義知の目に触れさせるべく送られたのであった。

『菅家須磨記』が金沢に存在したのは、どうやら偶然ではない。多田義俊の記すところによれば、「加賀侯某卿」ないし「加賀参議某卿」が金沢において一本を入手し、その写本を道真の子孫である京都の菅原氏六家に贈ったのだという。「加賀侯某卿」「加賀参議某卿」については、中村氏が、「参議とは、四位以上の人のなるもの、よって加賀参議とは、加賀宰相とも称された藩主代々の前田氏の外はない」と言われる通りであろう。金沢藩主の前田家は本姓菅原氏で、道真の流れを汲むから、左遷前後の道真の心境や周囲の人々の動向を克明に記した『菅家須磨記』にはいたく感動し、自家はもとより菅原氏各家には必備の書だと考えたということはいかにもあり得る話である。

もしこの記述が事実であるとなると、菅原各家に写本を贈った加賀藩主というのはいったい誰であろうか。

おそらくそれは、五代藩主松雲公前田綱紀（二六四三—一七二四）以外には考えられないであろう。綱紀の書物への高い関心は夙に著名で、尊経閣文庫の基礎を築いたことは広く知られている。金沢藩には書物奉行が置かれ、和漢の書物を購入・書写し、蒐集につとめたため、新井白石に「加州は天下の書府なり」とうらやまれたと言¹⁷う。先祖道真の著作に対する関心はもとより高く、『菅家文章』『菅家後集』の善本蒐集と本文校訂を藩の事業として行ったさまは、川口久雄氏の研究に詳しい。それによれば、綱紀は、「文章の校訂事業を進めるとともに抄出佳作選といったものを編纂した」と言い、また道真に関する書物の蒐集にも力を尽くし、元禄初年の頃には、「天下に道真の遺書を博搜した」と言う。そんな中で、『菅家須磨記』を発見したならば、綱紀は大いに喜んだことだろうと思われる。

それでは、前田家伝来の『菅家須磨記』が存在するのかというと、現在の尊経閣文庫には所蔵されていないようである。しかしながら、もと尊経閣蔵書で、現在は金沢市立玉川図書館の所蔵になる加越能文庫に二本が存在する。

一本は、明治時代に森田平次（良見）が編纂・書写した「松雲公採集遺編類纂」百九十冊の内の、「詞花部」第一七五冊の巻頭に収められているものである。『加越能文庫解説目録』上巻（昭和50年金沢市立図書館）には、「松雲公採集遺編類纂」について、

5代藩主前田綱紀（松雲公）は、古人の著書や多くの資料を採集し秘笈叢書と称したが、明治初年その多くを散逸し遺されたものを平次が朝廷、神社、寺院、地理、記録、書籍、古文書、碑文、系譜、軍事、教訓、衛生、楽譜、詞花、詩歌、雑の16に類別した。

と解説されている。扉題に「須磨記 俗傳云菅公之御作云々」とあり、本文は一面八行書き、全十六丁から成る。奥書や識語はなく、本文中の傍書や加点、行間注や欄外の書き入れ等もいっさいない。

この本の存在により、綱紀が蒐集した書物群の中に『菅家須磨記』があったことが判明し、傍記・振り漢字等が全くないことから、壺井義知や多田義俊により付注・校合が行われる以前の形態を遺していることになる。この本の写しが金沢の河島正卿の手に渡り、それが義知のもとにもたらされたという事情が推定される。義俊の記すところによれば、この本を入手した綱紀は感動して写本を菅原各家に贈ったというのだが、扉題に「俗傳云 菅公之御作云々」と添え書きがあるところを見ると、綱紀は『菅家須磨記』を道真自作とするのは「俗傳」に過ぎないと認識していたようで、道真自作を信じて菅原一族必備の書と考えたとはとても思えない。どうやら義俊の言には多分に潤色ないしは誇張が含まれているらしい。

前田綱紀は、享保九年（一七二四）五月九日に江戸で没した。享年八十二。綱紀の蒐集した書物の中に含まれていることから、『菅家須磨記』成立の下限は享保九年までさかのぼることになる。

加越能文庫に収められたもう一本は、文化十年（一八三三）に金沢藩士富田景周（一七四六―一八二八）が作成した校訂本とも言うべき本である。外題・巻首題とも「菅公須磨記」とある。墨付十一丁。巻尾に次のようなやや長文の奥書がある。

右須磨記ハ古言今言雜糅千とせちかく

あかりたる代の筆法には真贋狐疑するもの指を倒すにいとまあらずといへとも又後の

人の手にまたくなれるともおもほえずされは

雞肋の書なんめり

菅公の聖作とかりにも世にいふなればあか

君の

祖神のものし給ふこゝろさへなけにも見過

かたく数本を校して誤りを正し句讀を加へ

まゝ亦かたはらにかたはかり頭註を副へ家に

かくしぬしかれとも猶文義のわいたためかたき

ところ十に五六に涉れりやつかれ區々

耳觀の學ことに老て精を究め慮を竭し

またく考索に日子を費するを得ず幸ひに

今や京師諸國好古の学さかむなれば他日必

つはらなる名家完解の善本出へしこゝろ

あらむ人はそれを待てとり定めて

可ならんのみ

文化西の菊月中の八日

痴龍翁富田景周識

文化十年と言えば、『菅家須磨記』は版本を含めて相当世に出回っていた頃である。景周は数本を校合したと言っているが、具体的にどのような本を見たのかはわからない。「雞肋の書」（たいした価値はないが捨てるには忍びない書物）と言いながら、割に熱心に校合作業を行っているのは、主君前田家の祖先たる道真の著作と伝えられているからであろうが、肝心の綱紀蒐集の本を見た形跡がないのは不思議なことである。もし見ていれば奥書に何らかの言及があるはずなのに、それが無いのは見ていないのであろう。そのことは、前田家内においても『菅家須磨記』がさほど重要な書物と見なされていなかったことを意味するであろう。それは、同書が道真の自記などではなく、明らかな偽書と認定されていたからにはかならない。

一方で、世に流布している『菅家須磨記』の伝本には、義知奥書の本に「尤殊勝之御記也」とか「讀者盪漱而可拜見也」などとあり、義俊奥書にも「感恨不_レ少矣」と書かれ、蓬左文庫蔵A本や東海大学蔵桃園文庫C本に至っては、「尤珍敷御作なりふかく仰きあさしかに他見あるへからすあなかしこ」などと記すような、道真自記として珍重賞翫する姿勢とは大きな隔たりがある。前田藩における本書に対する冷めた扱いは、むしろ不自然な感がある。

そしてその理由は、おそらく松雲公綱紀が『菅家須磨記』を珍重すべき書として評価していなかったからではないかと考えられるの

である。

五 『菅家須磨記』の成立に関する憶説

さて、先に述べたように、『菅家須磨記』は享保十三年頃から盛んに書写されて世に広まった。金沢の河島正卿から壺井義知のところに『菅家須磨記』がもたらされたのはいつのことか定かではないが、おそらく享保十三年をさほどさかのほらないだろうと考えられる。すなわち、同書は、松雲公綱紀が死去してから時をおかず金沢から世に出た書物だということになる。

まったくの憶測に過ぎないのだが、筆者にはどうも『菅家須磨記』の成立には前田綱紀が関わっているように思えてならないのである。

綱紀は早世した父から三歳で家督を相続し、祖父の後見を受けながらも藩主となり、その治政は七十九年間に及んだが、享保八年（一七三三）五月九日、八十一歳の時に嫡子吉治（のちの吉徳）に家督を譲って隠居した。翌年五月九日に亡くなるまで隠居生活はちょうど一年であった。病ゆえの退老であったが、隠居後も比較的元気で、「老衰病であったから死にのぞんで老臣を引見し、また吉徳を招いて遺言を与え、自緘の長櫃三箇を授けるなど、最後まで綱紀らしく行届いたものであった」と言う¹⁹⁾。

この隠居中、綱紀がどのような暮らしをしていたのかわからないが、長年の政務から解放され、老病を養いつつも、書物に親しみながら穏やかに過ごしたのではなからうか。そんな中で、ふと遠祖菅

原道真の不遇な生涯に思いを馳せ、消閑の手すさびに菅公左遷前後の様子をまるで見てきたように綴る文章をものしてみたというようなことがあったのではないかと想像する。もともとは太宰府までの左遷の旅の行程を克明に綴り、配所での暮らしぶりや心境にまで及ぶつもりだったのだが、須磨に至ったところで後が続かなくなり、止めてしまったのであるかも知れない。須磨で、孫のかりや姫を都に送り返したところで、「さだめなき身、再びの対面、はかり難さ、書きつけぬべきに、筆短ければ洩らしぬ²⁰」と記して、やや唐突に終わるところは、途中で投げ出した感が否めない。ことさら古めかしい言葉遣いを多用して、道真の自記めかして書き進めてきたが、疲れて後を続ける気がしなくなったため終わらせることにしたのではないか。それも気楽な手すさび故である。

綱紀はこの完成したとも未完成ともつかない小品を、公表する意思もなく筐底に秘していたのだが、没後に遺品整理の過程で見出されたのであろうと思う。江戸で書かれ、金沢の地で発見されたこの作品は、河島正卿を通じて京都の壺井義知のもとに送られたことがきっかけで世に広まることになった。義知は、旧知の河島正卿からこの作品を受け取った時、出所について粗々知らされたはずで、偽書であることは百も承知の上で興味を惹かれ、振り漢字や傍注を施した本を作って、弟子や知人を通して世に流布せしめたのであろうと思う。弟子の一人であった多田義俊も、この怪しげな作品を面白く思っ、加賀侯が見出して菅原各家に写本を寄贈したというよう

なエピソードを創作して書き付けたりした。そんな事情を想像してみる²¹。

おわりに

『菅家須磨記』の流布に貢献した人物として、壺井義知と多田義俊が挙げられ、それぞれ偽作者の候補とされているのだが、追究しているうちに、加賀藩主松雲公前田綱紀偽作説にまで行き着いてしまった。そんなことはあるはずがないとの批判もあると思うが、文武両道に秀で、菅公の詩作品の研究のみならず、『うつほ物語』の研究をも手がけたという綱紀であれば、そのくらいの手すさびの文筆能力は十分に備えていたはずである。「菅公に擬して作った一種の弄文であつて、広く世に流布させるよりは、限られた同好の知人へのみ示すべく執筆したのではないかと思う」と言われた中村氏の見解はまさにその通りだが、あるいは同好の知人どころか自分で楽しむために書かれた可能性もあろうと思う。そして、中村氏が作者に擬された義俊や義知は、むしろ意図してこの作品を世に広めようとしたのだと思うのである。

〔注〕

- (1) 引用は、吉川幸次郎・佐竹昭広・日野龍夫校注、日本思想大系『本居宣長』（昭和53年 岩波書店）による。
- (2) 引用は、架蔵の版本（河内屋源七郎板 刊年不明）による。

- (3) 引用は、岩田友晴著『菅公遺著 須磨記』（明治35年 菅公須磨記発行所）による。国立国会図書館ウェブサイトの「電子図書館」近代デジタルライブラリー」において公開されている画像を使用した。
- (4) たとえば、佐村八郎著『註國書解題』（大正15年 六合館）には、「須磨記本写一卷」として、「菅原道真左遷の時、京都より須磨浦に至りし道の記なり。されど菅公の作ならざる事は幾多の先輩に論ぜり。本居宣長も『玉勝間』に、「須磨記といふものなどは、や、世にひろごりて、誰れもまことと思ひためる、これはたいみじき偽書なるをや」云云といふ。明和八年辛卯（二四三二）の奥書あり」と記す。
- (5) 津本信博編著『近世紀行日記文学集成』一（平成5年 早稲田大学出版部）「解題」。
- (6) 以下、本稿における『菅家須磨記』の伝本の呼称は、拙稿「菅家須磨記」の基礎的研究・序説——諸伝本とその奥書について（付・架蔵本翻刻）——『広島大学大学院文学研究科論集』第67巻（平成19年12月）に掲げた伝本名を用いた。
- (7) 注(5)に同じ。
- (8) 傍書の「川嶋氏」は本行と同筆と見られる。いったん「或人」とぼかして書いたものの、後で気が変わって実名を記したのである。その意味で、後のⅠ・Ⅱのパターンよりは古い形の奥書と考えられる。
- (9) 引用は、『日本随筆大成』第二期（平成6年新装版 吉川弘文館）による。
- (10) 竹内誠・深井雅海編『日本近世人名辞典』（平成17年 吉川弘文館）の「壺井義知」の項（鈴木真弓執筆）。
- (11) 日置謙著『改訂増補加越能郷土辞彙』（昭和31年 北国新聞社）によれば、「カハシママサノリ」と読んでいる。
- (12) 中村幸彦「擬作論」『中村幸彦著述集』第十四巻「書誌聚談」（昭和58年 中央公論社）所収。初出は、今井源衛教授退官記念文学論叢刊行会編集『今井源衛教授退官記念文学論叢』（昭和57年 九州大学文学部国語学国文学研究室）。以下、特に断らない限り、中村氏の説は同論文による。
- (13) 引用は、富田景周編『燕台風雅』四（大正4年 観文堂〈創業七十周年記念出版〉）による。
- (14) 『日本古典文学大辞典』第四巻（昭和59年 岩波書店）の「多田南嶺」の項（中村幸彦執筆）。
- (15) 大阪天満宮蔵の二本では、巻頭の見返や扉に記されているの奥書とは言えない。識語と云うべきかも知れないが、本稿では便宜上「奥書」と呼ぶ。後掲のように、D本の記事は他と異なり、末尾がやや簡略化されている。
- (16) 注(10) 掲出書の「多田義俊」の項。
- (17) 若林喜三郎著、人物叢書『前田綱紀』（昭和36年 吉川弘文館）。
- (18) 川口久雄校注、日本古典文学大系72『菅家文章 菅家後集』（昭

和41年 岩波書店）「解説」。

(19) 注(17)に同じ。

(20) 『菅家須磨記』の引用は、千本英史責任編集『日本古典偽書叢刊』第二卷（平成16年 現代思潮新社）による。

(21) そういう意味で、神宮文庫蔵D本（「清渚集」所収本）に見える編者中川経雅つねたかの識語に、「この須磨の記といへるは菅家のしるし給ふけるよしにて、加賀国川嶋の何かしかもたりけるを、壺井義知これをうつし、又多田義俊かうつしとりけるとて世にひろこれり」（句説点は引用者）と記すのは『菅家須磨記』の初期の流布の経緯を説明したものとして正しい認識である。

(22) 中村忠行「松雲公前田綱紀の『宇津保物語』研究」『天理大学学報』第三十六号（昭和36年12月）。

〔付記〕 本稿は、国文学研究資料館の基幹研究（A）「王朝文学の流布と継承」の成果の一部であり、平成二十一年五月二十二日に国文学研究資料館において開催された平成二十一年度第一回共同研究会で発表した内容を基に、その後に得られた知見を加えて成稿としたものである。発表当日に貴重なご意見を賜った方々に御礼申し上げるとともに、御所蔵資料の閲覧調査に際して便宜を図って下さった、国文学研究資料館、国立公文書館内閣文庫、天理大学附属天理図書館、金沢市立玉川図書館、大阪天満宮文化研究所、その他関係諸機関の各位に、記して厚く御礼申し上げる次第である。

An Essay on the Appearance and Spread of *Kanke-suma-no-ki*

Yoshinobu SENO

Kanke-suma-no-ki is a writing dealing with travels which depicts how Sugawara Michizane, who had been left for Dazaifu, departed Kyoto for Suma. It was formerly believed to be written by Michizane himself. However, since Motoori Norinaga asserted that it was a forgery, it has been considered that the book was written only after the Edo period. In fact, the true author and the precise date cannot be determined.

In this paper, I considered the appearance and the author of *Kanke-suma-no-ki* through the examination of the postscripts in the various handwritten copies. As a result, it can be deduced that *Kanke-suma-no-ki* was written by the Kanazawa lord Maeda Tsunanori (1643-1724). I pointed out that the book was found after his death in Kanazawa and then brought to Tsuboi Yoshichika (1657-1735), a scholar in Kyoto, and that the volume, transcribed and revised by Yoshichika, was further transcribed by his students and acquaintances to become known in the world.